



房州とイタリアを愛した画家

寺崎武男・生誕 140 年

*シンポジウム 2023年4月1日(土)

基調講演 「日伊交流史における寺崎武男」

石井元章 (大阪芸術大学教授)

調査報告 「手帳と書簡から見える寺崎武男の世界」

愛沢伸雄 (NPO 法人安房文化遺産フォーラム代表)

*作品資料展 3月25日(土)～4月5日(水)

午前 10 時～午後 4 時 (最終日 3 時・月曜休館)

会 場:千葉県南総文化ホール 入場無料・資料代 500 円

寺崎武男は 1907 (明治 40) 年にイタリアへ渡り、ヨーロッパ美術の諸技法を研究し、日本に紹介した近代絵画の先駆者です。大正末期から千葉県館山市に暮らし、戦後は安房高校の美術講師としても後進の育成に務めました。友人や家族と交わした膨大な書簡や手帳・スケッチ帳から、寺崎家のファミリー・ヒストリーや壮大なネットワークが見えてきました。日伊親善に尽くした先人の姿を再発見しましょう！



主催: NPO 法人安房文化遺産フォーラム 問合せ: 0470-22-8271・090-6479-3498

後援: 館山市・南房総市・館山市教育委員会・南房総市教育委員会・館山市観光協会・房日新聞社

安房美術会・安房神社・布良崎神社・下立松原神社・イタリア文化会館・イタリア書房・葦崎大村美術館



房州とイタリアを愛した画家・寺崎武男生誕 140 年

2019（令和元）年のGW、旧館山市立富崎小学校で開催した「海とアートの学校まると美術館」では、館山ゆかりの3人の画家（青木繁・倉田白羊・寺崎武男）を紹介しました。この模様は安房文化遺産フォーラムのYouTubeから動画を見ることができます。



寺崎武男は1883（明治16）年3月30日に東京赤坂で生まれ、東京美術学校を卒業後、国の留学生としてイタリアに渡りました。ヴェネツィアの美術アカデミーで人体・彫刻・建築・版画の4科を卒業し、ドイツベルリンの大学で壁画科や宗教哲学科・歴史科を修めました。ヴェネツィアを中心に国内外をめぐり、フレスコ画やテンペラ画・エッチング・壁画・版画など様々な技法を学び、日本に紹介しました。特にルネサンス壁画の描画や保存方法を研究し、東西文化の融合を目指しました。

横山大観を中心に開かれた「羅馬開催日本美術展覧会」（イタリア政府主催・大倉喜七郎後援）では、寺崎は通訳・コーディネーターを務めました。同時期に、観音を描いたテンペラ作品『幻想』は、ヴェニス・ビエンナーレ国際展で日本人初の入賞を果たし、イタリア政府の買上となりました。王立高等商業学校の日本語教師を務め、『日本のことば』などを発行しました。多年の日伊交流に貢献した功績から芸術名誉賞はじめ、イタリア国王や政府からコメンダトーレ賞など多数の勲章を授与されています。

また、留学初期に出会った『天正遣欧使節』の行跡に感銘を受け、16世紀に日本から海を渡り、ローマ法皇に謁見して外交を果たしながらも、禁教から鎖国へ向かう時代に翻弄された少年たちの姿を後世に伝えようと、生涯にわたりをこのテーマを描き続けました。

一方、日本国内でも第11回文展で入選したフレスコ画『飛鳥朝の夢』はじめ、精力的に作品を製作しています。テンペラ画『黄帆船図』は大正天皇の病室に飾られ、崩御後は東京帝室博物館の買上げとなり納められました。

創作版画協会やテンペラ画会、壁画協会などの設立に関わり、東京大学病院や日本医師会館、目黒サレジオ教会などに壁画を描きました。

明治神宮奉賛会より絵画館開設のために壁画調査を依頼されて再渡欧し、イタリア各地で模写をしながら画材や画質の研究をし、7回の報告書を提出しています。聖徳記念絵画館には『軍人勅諭下賜ノ図』が納められています。

早くから法隆寺の壁画研究に取り組み、防火設備のないことを危惧する論文を大正期に書いています。後に、彼の懸念どおり火災が起きて金堂壁画が焼失してしまいましたが、寺崎は9年がかりで法隆寺輪堂（旧経堂）の壁画を描き上げました。

『遣欧使節ヴァチカンへの行列』

『ヴェネツィアの歓迎～レデントーレの祭』

6曲屏風 鳥ノ子と紙・テンペラ

寺崎武男画 1917年 星野画廊蔵



海外で高い評価を得て、日本美術史にも大きな影響を与えた寺崎ですが、その画績はあまり知られていない「幻の画家」です。親交のあった三島由紀夫は、「無理解と孤立には少しも煩はされずに、悠々と、晴朗に、芸術家たるの道を闊歩していた。あくまで走らず、跳ばず、悠揚たる散歩の歩度で。氏こそ、真の意味で、芸術家の幸福を味わった人ではなかろうか」と回顧展にメッセージを寄せています。

館山には、美校の師でありイタリア留学の先輩である彫刻家・長沼守敬が先に移住していました。彼を慕って訪れるうちに、館山の西ノ浜に別荘を建て、やがて定住しました。房総の神話を多く描き、安房神社や布良崎神社、下立松原神社などに奉納しています。

東京女子美術学校洋画科主任を2年務め、1949（昭和24）年から千葉県立安房高校の講師となり、若者たちに情熱あふれる美術指導を授けました。兵藤益男校長の理解ある支援のもと、テラコッタ（土焼）で『自由の女神像』を制作しました。生徒も教職員も「まるで外国のようだ」と驚いたといいます。翌年の校長交代に伴い取り壊しが命じられたものの、懇意にしていた千倉の七浦中学の栗原幸太郎校長の配慮で移転し解体はまぬがれました。しかし数年後、残念なことに側溝工事の重機で破壊されてしまったとのことでした。

また、安房高校では修学旅行で法隆寺に立寄り、制作中の壁画を見学した生徒たちもいたようですが、あいにく現在は公開されていません。



<寺崎武男 回顧展に寄せられた三島由紀夫のメッセージ>

私たち NPO では、遺族から多数の作品とともに、膨大な書簡と数十冊の手帳やスケッチ帳等の寄贈を受けており、資料の分類整理・解析調査に取り組んできました。現在 500 枚を超えるハガキの解読が進み、国際的に活躍した寺崎家のファミリーヒストリーや壮大なネットワークが見えてきました。

寺崎家は儒学者の渡辺華山と交流があったといわれ、祖父・助一郎は幕末に長崎奉行の役人として外国要人の通訳に従事しました。父の遜は英国留学で学んだ電信技術を全国に広めた人物のひとりで、後に山縣有朋の洋行随員や山縣内閣総理大臣秘書官まで務めました。武男の美校入学直前に亡くなっています。長兄の渡は渡欧留学で林業を研究した林学者で、「寺崎式間伐技術」を考案しました。次兄の熊雄は弁護士になりました。母セツは夫亡きあと、武男の進学・留学を支えたゴッドマザーです。セツの実家松澤家にも金融業・政治家・弁護士、そして一高水泳部から極東金メダリストや五輪監督となった松澤一鶴などがいます。

寺崎の友人もそうそうたる顔ぶれです。城郭研究やルネッサンス史の第一人者で歴史学者の大類伸。何度もノーベル賞候補にあがった医師であり文展帝展に7度も入選した画家の呉建。美校の同期で、ロンドンに学んだ南薫造やニューヨークに学んだ平井武雄。フランス文学者で美術研究に造詣が深く、松方コレクションのアドバイザーとなった成瀬正一・・・などなど。

こうした家族や友人らと交わした書簡は、互いへの尊敬と芸術への情熱にあふれ、西洋画の研究に影響し合ったであろうと推察される寺崎のバックボーンが読み取れます。

そこで、館山市立博物館の生誕 120 年記念展から 20 年を経た今春、安房ゆかりの先人を顕彰し、調査研究を報告する機会として、「房州とイタリアを愛した画家・寺崎武男生誕 140 年」を企画しました。ルネッサンスの壁画を研究した寺崎の作品は、画面の対角線の 7 倍離れた距離から見ると焦点が合い、奥行きや立体感を感じるといいます。同時開催の作品資料展もお楽しみください。

NPO 法人安房文化遺産フォーラム
共同代表 池田恵美子